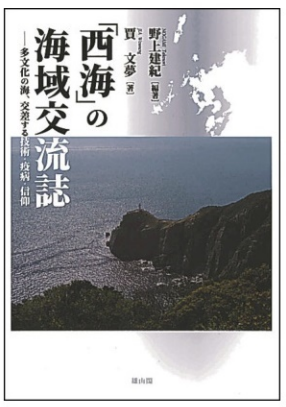
郷土の本

40年の研究蓄積 淡々と

「西海」の海域交流誌

野上建紀編著・賈文夢著



歴史を振り返ると、九州北西部の海域は、まさに「海の十字路」だった。朝鮮半島と琉球列島を結ぶ縦軸。長崎・五島列島を経て中国大陸へつながる横軸。いつの時代も人や文物、情報が行き交っていた。

本書では、長崎大の考古学者である編著者が、中国出身の留学生、賈文夢（かぶんむ）さんとともに江戸時代の動きを追った。「肥前磁器」「天然痘（疱瘡（ほうそう））」「潜伏キリシタン」。関係なさそうな三つのキーワードが、五島列島や熊本・天草地方を中心とした遺跡調査で結びつく。

特に、聞き慣れない「疱瘡墓」は興味深い。天然痘で亡くなった人々の墓。罹患（りかん）者は人里離れた土地へ追いやられ、一般の墓地ではなく隔離地近くに葬られ、死後も忌避された。当時の疾病対策はもちろん、海外から持ち込まれたウイルスとの戦い、差別の歴史を伝える。

疱瘡墓では陶磁器が発見される。成人女性が化粧具として使う紅皿など、被葬者像や隔離治療生活を知る手掛かりだ。天然痘の隔離地近くでは、潜伏キリシタンの集落が形成された。共通の背景として、西海の地理的な特性があるという。

歴史学では対外交流の華々しい側面にスポットライトが当たりがちだが、負の教訓に目を向けることも学問の責務だ。長崎大がある九州本土は西海の東縁に位置し、島々へのフィールドワークは苦労を要した。約40年前に調査を始めた編著者。地道な研究の積み重ねが淡々とつづられている。（野村大輔）

（雄山閣・４１８０円）

(C)西日本新聞社　無断転載、複製及び頒布を禁止します。